



- 二十二年 俳誌「野火」に参加
- 二十四年 日本銀行退行・稼業継承
- 二十八年 俳誌「寒雷」同人
- 二十九年 現代俳句協会会員
- 三十四年 現代俳句連盟設立「畠野」創刊・代表者
- 三十五年 東北俳句大会主催
- 四十四年 福島県文学賞審査員
- 四十六年 福島地方裁判所・同家庭裁判所  
・同簡易裁判所、調停委員
- 四十九年 福島県芸術賞受賞
- 四十九年 福島県俳句作家懇話会を結成、初代会長
- 五十年 福島県芸術文化功労者表彰
- 六十二年 東北地区現代俳句協会会長
- 六十三年 現代俳句協会幹事
- 平成元年 最高裁判所長官表彰
- 三年 藍綬褒章
- 四年 福島県文化功労賞受賞

目に見えぬ事物への感動、それを発見し感動する。驚く、びっくりする。その作業とは一体どんなものなのか？

川端康成の名作に「雪国」の長編がある。彼が文学者として、どう素材に対し「驚きと発見」の目を光らせていたか、すこし並べてみよう。(傍線は筆者)

◆ 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。

◆ 裸の天の川は夜の大地を素肌で巻こうとして、すぐそこに降りて来ている。恐ろしい艶めかしさだ。島村は自分の小さい影が、地上から逆に、天の川へ写っていきそうに感じた。天の川の底なしの深さが、視線を吸いこんで行った。

私は何を書くかではなく、どう書くのかの一つの証しとして、雪国の一章を取り出した。文学の表現の恐ろしさをまざまざと見る思いがする。

現代に書かれ発表されている多くの文章の軽薄さは「事実をそのまま書く」、つまり何をに焦点が当たっていて「どう書く」「どう」と言う感動伝達力を忘却しているところに原因があるのだろう。「どう」には繰り返し申し上げるが、感動・驚き、新らしい視点感覚を養成せねばならぬ事を考えていただきたい。単なる事実報告書では困る。価値が全く無いのだ。その世紀を背負う人々の養成、その一つの問題点として……。

## 提言